

---

## 4. 小麦の生産振興等

---

### (1) 模範となる農家・集団を表彰 －北海道麦作共励会－

北海道麦作共励会は、第1回が昭和55年度に開催され、平成11年度で第20回を数えております。ご承知の通り、麦は米と同様に、昭和17年に制定された「食糧管理法」により、国の直接統制を受けて、買入れ・売渡しが行われてきました。

昭和27年、麦に関する制度改正がなされ、制度的には“自由な民間流通を前提に生産者の申し込みに応じて、無制限買入れを行う”という間接統制に移行しましたが、これが実質的な民間流通に移行したのは、48年経過した平成12年産からであります。

国内における麦の生産は、畑作・水田裏作・転作という態様で行われており、特に北海道にあっては、合理的な輪作体系の下での、畑作営農の確立を図る上で、不可欠な作物であることは論をまちません。しかし、麦は主要食糧として位置づけられていますものの、自給率が8～9%と低く、米の制度・政策及び需給関係により、麦の生産動向が大きく影響を受けてきたことも事実であります。

昭和43年に麦管理改善対策が打ちだされましたが、依然として、国内麦の生産と供給が不安定で、一時は、“麦の安楽死か”と云われる状況となりましたが、生産者の経済作物としての位置づけ要求と、製粉メーカー・実需・消費者より「良質麦の安定生産・安定供給」を求める要望が一致したことから、国も昭和49年に麦作生産振興対策実施要領を設定し、国内産麦の生産振興を図りました。(昭和40年全国475,900ha－昭和48年74,900ha)

米の需給事情は、昭和40年代に入って過剰基調となり、米余り対策として、昭和46年から生産調整を実施し、昭和53年以降、全国的に転作麦が増加

することとなりました。

北海道の小麦は、昭和47年に7,690haまで激減して憂慮されましたが、畑作の輪作体系を確立するため、必要欠くことができない作物です。昭和50年代に入ってから、本格的な麦作振興を推進し、昭和56年106,000ha、平成元年には129,700haとなりましたが、米の転作緩和もあって、ここ数年95,000ha前後で安定しています。

本会も、昭和36年に米主体の法人組織「社団法人 北海道産米改良協会連合会」として発足しましたが、その後の環境変化と時代の要請により、麦作生産振興を含めた組織にすべく、昭和55年に「社団法人 北海道米麦改良協会」と、名称変更したのを契機に「第1回北海道麦作共励会」を開催いたしました。

共励会の狙いは、良質麦生産の基本となる、生産技術及び品質向上、経営改善の面から、他の模範となる麦作農家及び集団を表彰し、その業績を広く紹介し、もって麦作農家の経営安定を図るもの、とした趣旨は現在も変わるものではありません。

ここで、共励会成績概要から、過去20年（1980年～1999年）を振り返って見ますと、

- 1) 作況指数（全道）は、「良（106以上）」6カ年・「やや良（102～105）」2カ年・「平年並（99～101）」1カ年・「やや不良（95～98）」3カ年・「不良（94以下）」8カ年となっています。

（最高は昭和60年産の127で最低は平成7年産の58）

- 2) 10a当たり収量（全道単純平均）は、「良（6カ年）」405kg・「やや良（2カ年）」354kg・「平年並（1カ年）」391kg・「やや不良（3カ年）」387kg・「不良（8カ年）」289kg、20年平均では350kgとなっています。

（最高は昭和60年産の433kgで、最低は昭和56年産の231kg）

- 3) 共励会最優秀者（個人の部）の成績から、反収・等級・粗収益等を考察しますと、

- ①10a当たり収量（全道単純平均）は、「良（6ケ年）」711kg・「やや良（2ケ年）」564kg・「平年並（1ケ年）」698kg・「やや不良（3ケ年）」699kg・「不良（8ケ年）」565kgで、20年平均では635kgとなっ

ています。

(最高は平成10年産の794kgで、最低は昭和56年産の492kg)

- ⑥上位等級麦の出荷比率も、全道的に2等麦主体の昭和50年代にあって、又昭和60年代になり、1等麦の出荷比率が向上したとは云え50%程度である中で、さすが最優秀賞を受賞するにふさわしく、ほぼ100%に近い1等麦の出荷実績です。
- ⑦10a当たり粗収益・経営費・所得は、麦価・主力品種の変化・品種による収量格差等との関連から、単純比較は適当ではありませんが、参考として見て下さい。

畑作地帯の個人の部における20年間の単純平均

①粗収益 110,530円

(最高は昭和60年の141,700円、最低は平成5年の87,804円)

②経営費 41,992円

(最高は平成3年の50,220円、最低は平成8年の26,144円)

③所得 68,538円

(最高は昭和55年の105,429円、最低は平成7年の49,482円)

④所得率 62%

(最高は昭和55年の76.5%、最低は平成3年の50.2%)

- 4) 共励会最優秀者(個人の部・集団の部)の経営及び栽培技術の特徴を総括しますと、栽培技術面では「基本技術の励行」、経営面では二宮尊徳翁の教えにある「入るを計って、出ずるを制す」の哲学を持ち、常に創意・工夫を重ね、必ず実践する信念が伺われます。
- 5) 北海道共励会の成績優秀者を、全国共励会に推薦して、常に上位入賞を果たしてきましたが、念願であります全国最高位の農林大臣賞を、昭和60年に集団の部で受賞し、その後も集団の部で、平成2年・平成3年・平成6年と受賞しました。個人の部で農林大臣賞を受賞したのは、平成9年が最初であり、主産地北海道としては遅きに失した感はありますが、翌平成10年も農林大臣賞を受賞し、名実ともに主産地北海道の声価を示したものと思います。

最後に、北海道麦作共励会で、最優秀賞を受賞した個人・団体の方々が異

口同音に云われることは、「栽培技術で他人と変わっていることはないと思います。ただ、基本を忠実に実行しているだけです」と言葉は少ないですけど、意味するところは“海より深く、岩より重い”ものと受け止めるべきでしょう。

「 Back to the Basic (基本に帰れ)」よ永遠に。

<八木 一三>